

山蘭

〔源氏物語藤十〕例よりもまめりたる御氣色、いとらうたげにおかし、かゝるついでにとや思ひよ  
りけんらにの花のいと面白きをも給へりけるを、みすのつまよりさし入て、是も御らんずべき  
ゆへは有けりとて、とみにもゆるさでもたまへれば、うつたへに思ひもよらでとり給御袖をひ  
きうごかしたり、

おなじ野の露にやつる、ふぢばかまあはれはかけよかごとばかりも

〔拾遺和歌集物七〕らに

よみ人まらす

秋の野に花てふ花を折つればわびしらにこそ虫もなきけれ

〔續拾遺和歌集雜十八〕諒闇の年の秋鳥羽殿に美福門院おはしましける比、前栽に蘭のまをれて見  
えけるを折て、人につかはしける、  
皇太后宮大夫俊成

なべて世の色とは見れど蘭わきて露けき宿にも有かな

〔重修本草綱目啓蒙芳九〕蘭草略○中

山蘭アリ、山野ニ生ズ、葉ハ長クシテ岐ナク、桃葉ニ似テ鋸齒深シ、又三尖ニナリテ蘭草葉ノ如キ  
モアリ、ミナ兩對シテ生ジ、莖ニ斑アリ、葉ト俱ニ毛茸アリテ香氣少シ、此ヲヒョドリバナト呼ブ、  
花ニ白色淡紫色ノ二品アリ、藥ニ蘭葉ヲ用ユルハ、此蘭草ノ葉ニシテ、蘭花ノ葉ニ非ザルコト、正  
誤ニ詳ニ辨ズ、然ルニ綱目以後ノ書、本草必讀、本草原始、ソノ餘諸書ニ猶誤リテ蘭花ノ葉トスル  
說多シ○中

増、山蘭ニ一種葉ニ黃白色ノ斑點多キモノアリ、コノ莖葉ヲ煎ジテ、蝮蛇ノ咬タルヲ洗テ奇効ア  
リ、野人ノ經驗ナリ、阿州山城谷ニテハミグサト云フ、

〔古今要覽稿草木〕ひよどりばな 山蘭

ひよどりばな一名やまどりぐさは、漢名を山蘭といふ、近邊山野處々これあり、その莖葉すべて